慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　１回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

平成30年 新年祝賀式開催

新病院棟竣工の年 新世紀への期待を胸に

医学部では、毎年新春を迎えて、教職員および三四会員による新年祝賀式を開催しています。今年も、1月5日(金)に慶應義塾大学病院2号館11階の大会議室で開催されました。

慶應義塾大学と親交の深い学校法人北里研究所から、小林弘祐理事長のほか役員の方々、また北里家を代表して北里一郎氏を来賓として迎え、冒頭に天谷雅行医学部長が年頭の詞を述べ、長谷山彰塾長、小林弘祐北里研究所理事長、武田純三三四会長、鈴木則宏医学部教授（教職員代表）からそれぞれ賀詞が述べられました。

また、北川雄光病院長の乾杯の発声で始まった懇親会では、三四会役員の方々、関連病院会、医学部、看護医療学部、薬学部の教員の方々等が参加し、それぞれ新年の挨拶を交わし、新病院棟竣工の年のはじまりを祝いました。

新年祝賀式と併せて「坂口光洋記念慶應義塾医学振興基金」に基づく医学研究奨励賞授賞式が行われ、藤田淳特任准教授と山田満稔助教の2名が受賞されました。（撮影：井上悟）

新年祝賀式の様子

医学研究奨励賞受賞者。左から、柚﨑通介医学研究奨励事業委員長、藤田淳特任准教授、長谷山彰塾長、山田満稔助教、天谷雅行医学部長

小林弘祐北里研究所理事長によるご挨拶

JK・iC産学医連携の取り組み

領域1 Precision Medicine「精密医療」

先端医科学研究所 遺伝子制御研究部門教授　佐谷　秀行（60相当）

がんの治療において、標準治療と呼ばれる平均的な患者向けの医療には限界があることから、個々の患者におけるがんの特性に基づく医療、つまりpersonalized medicine（個別化医療）が注目されている。しかし、一人一人の患者に合わせた治療は理想ではあるが、その解析や薬剤開発に要する時間やコストを考えると現実的には難しい。そこで、患者を一定のサブグループ群に分けて、それぞれのサブグループに適した治療を行おうという考え、つまり標準治療と個別化医療の間に位置する医療がPrecision Medicine（精密医療）である。

これまでのサブグループ分けは、ゲノムの配列の違いに基づいて行われてきたが、本領域ではプロテオミクス、エピジェネティクス、メタボローム解析などオミックス解析データを取り入れて、多角的な生物学的情報及び医療情報をベースに実施し、最適な医療の提供を目指す。更にprecision medicineを、患者間をサブグループに分けて適切な治療を実施するという現行のアイデアから、腫瘍組織を構成する細胞の不均一性を検出する手段を見出し、その不均一な細胞をサブグループ化し、それぞれのサブグループに対する新たな標的治療法を開発する方向に発展させる。

腫瘍組織の不均一性を誘導するメカニズムとしては、ゲノム変異はもちろんの事、がん幹細胞を頂点とした分化の違い、上皮間葉転換などエピジェネティックな変化が考えられる。そして最終的には、腫瘍が含有する細胞のサブグループを検出し、それらの要素を持つ患者をサブグループ化し、バイオインフォマティクスの技術を駆使して、分子標的治療や免疫療法を含む適切な治療を併用することで、がんを根治出来る新たな戦略を構築することを本領域のミッションとしている。

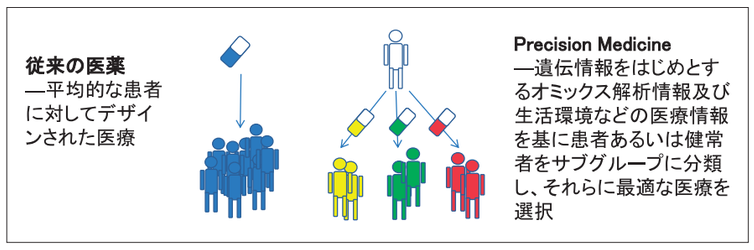
また、本領域では主としてがんを標的疾患の中心に据えて戦略研究を行うが、手法や考え方を遺伝病など難治性あるいは希少性疾患の治療にも応用する。

具体的には現時点で以下の6つの戦略プロジェクトが計画されており、慶應義塾大学医学部の研究者とJSRの研究者が協働して、研究を推進し、実装化を目指す。

①がんの不均一性を評価するバイオマーカー探索
②人工がん幹細胞（iCSC）を基盤とした腫瘍マウスモデルの構築と創薬への応用
③人工線維芽前駆細胞によるがん・遺伝病への応用
④がん免疫療法　治療法選択のためのがん組織診断とリキッド・バイオプシー
⑤がん免疫治療用抗腫瘍T―細胞の選択、免疫マーカー・腫瘍抗原の探索
⑥がん初代培養並びに抗がん剤感受性評価系の開発

これらの基盤的な戦略プロジェクトにがんゲノム解析に基づく治療法選択などのプロジェクトが加わり、次世代のprecision medicineを構築する。

JSRには診断薬関連素材や、抗体・RNAの検出技術、臨床検査薬開発など実用化のノウハウが豊富にあり、基礎研究の早い段階から基礎研究者および病院の医師と共にプロジェクトを進めることで、迅速に社会のニーズにこたえる「産物」の取得が期待できる。領域1としては、これらのプロジェクトを通して、産学医連携の新しい姿を示したいと考えている。



新病院棟建設事業募金

新病院棟完成に向かって募金期間あと1ヶ月余り！
建物にお名前を残します　【受付〆切：３月３１日】

＊銘板の掲出条件
～個人・法人・有志団体～
寄付累計額　100万円以上
～有志団体について（Q４参照）～
構成人数　５名以上

＊銘板掲出場所
新病院棟（１号館）１階正面入口付近
ホスピタルモール（予定）

■募金に関するお問い合わせ先

慶應義塾基金室（平日９:00～17:00）
TEL：03-5427-1898　E-Mail：kikin-box@adst.keio.ac.jp

三四会募金事務局（平日９:00～17:00）
TEL：03-3356-5568　E-Mail：shintoubokin@sanshikai.jp

【新病院棟への募金まるわかり】

Q１：銘板はどこに出来るのですか？
A１：新病院棟（１号館）１階正面入口付近のホスピタルモールに掲出し、ライトアップする予定です。

Q２：銘板の対象者の条件は？
A２：**下記、募金名称・期間種別中のA＋Bへの寄付者**が対象です。個人・法人・有志団体いずれかで、寄付累計額100万円以上が条件となります。下記Cへのご寄付につきましては、既に日吉・三田キャンパスに銘板が掲出されています。

Q３：募金申込はいつまで可能ですか？
A３：2018年３月31日までとなります。

Q４：有志団体と個人の寄付はどう違うのですか？
A４：有志団体は慶應義塾基金室にご登録頂いた５名以上のグループとなります。ご登録については慶應義塾基金室までお問合せください。

Q５：いくら寄付をしたかわからなくなったらどこに連絡をしたらいいですか？
A５：慶應義塾基金室または三四会募金事務局までお問い合わせください。（お問い合わせ先参照）

Q６：ピンバッジを頂きましたが、銘板にも寄付者名が載りますか？
A６：ピンバッジと銘板では**条件が異なります**。ピンバッジは募金名称・期間種別中のA＋B＋Cが基準となります。銘板はA＋Bが基準となります。ご不明な点は、慶應義塾基金室または三四会募金事務局までお問い合わせください。（お問い合わせ先参照）

■新病院棟建設にかかわる募金名称・期間種別
A　新病院棟建設事業募金
（2013年１月１日～2018年３月31日）
B　使途指定寄付（信濃町新病院棟建設資金）
（2010年10月１日～2012年12月31日）
C　創立150年記念事業募金（信濃町新病院棟建設資金）
（2005年10月１日～2010年９月30日）

募金の声

「恩返し」

医療法人平和会理事長　吉沢　守（56相当）

三四会広報より「募金の声」への投稿依頼を受け、今回、新病院棟建設事業に寄付をさせて頂くに至った経緯を寄稿させて頂きました。

私は、昭和43年慶應志木高卒後、一時文系へ進み中退。昭和52年岩手医大卒後、慶應内科学教室へ入局（56相当）。約10年間腎・内に在籍。昭和63年医療法人平和会（人工透析）を開設し、現在に至っております。今回応募した理由は、単にお世話になった塾への恩返しに他なりません。私共吉沢一族は四代に渡り、塾の恩恵を被って参りました。初代は祖母です。私の父は、慶應医学部23回生で、終戦直後、荒廃した慶應病院で、伝説の長谷川弥人先生に怒鳴られながら、二人で全病棟を診ていたそうです。

その頃、祖母が破傷風に罹患し、慶應病院に入院、治療を受けました。余談ですが、祖父母は夏目漱石と親交が深かった由。祖父は「坊ちゃん」に登場する「山嵐」のモデルとされる数学者で、小説のとおり正義感が強く、愛情深い熱血漢だったそうです。二代目は父で、「山嵐」の性格をそのまま受け継ぎ、皆に愛される人でした。そんな性格からか、同期生（影山圭三先生、土屋健三郎先生、吉岡守正先生等）が、度々、我家に集結し、酒を酌み交わしながら、夜遅くまで語らっておられました。私も多くの事を人生訓として学ばせて頂きました。三代目は私。四代目は愚息、吉沢城（85相当）です。現在、慶應救急科に所属し、佐々木淳一教授の下で学ばせて頂いております。

昨年５月、我が志木高の後輩、戸山芳昭先生と岡野栄之先生の主導で、医学部百年記念行事が開催されましたが、その歴史の八割近くの期間、吉沢一味は慶應医学の恩恵を被って来たことになります。

いつの日か、頂いた恩に報いたい、と考えていた折、今回のお話を頂き、渡りに船で、僅かながらの協力をさせて頂きました。

この様な機会を与えて頂いた事に感謝いたします。

次の100年に向けて～新執行部に寄せる期待～

関連病院会会長　東京都済生会中央病院院長　高木　誠（58回）

医学部新聞１月号掲載の竹内常任理事、天谷医学部長、北川病院長による「2018新春特別座談会」を興味深く読ませていただきました。今年は100周年記念事業として計画された新病院棟が竣工し、医学部にとっては次の100年に向けた新たな慶應医学が始動する大切な年です。座談会では新執行部による新しい時代への抱負と意気込みが力強く語られており、社中の一員としてとても頼もしく思いました。

２～３年前からだったでしょうか、玄関を通り病院の中に足を踏み入れた時に「慶應病院の雰囲気は変わったな」と感じるようになりました。正直言ってそれまでの慶應病院は古い体質の大学病院に有り勝ちな「院内は雑然としていてみんながいつも何かに急かされている」という雰囲気でした。患者さんファーストの病院とはとても言えるような状態ではなかったと思います。しかし、竹内常任理事が病院長となり、臨床研究中核病院の認定取得を目指し始めた頃から慶應病院の体質は確実に変わり始めたと思います。院内には落ち着きが出て、患者さんを大切にしようという雰囲気が感じられるようになりました。これは簡単に成し得ることではなく、病院長が先頭に立って職員の意識改革を行った成果です。是非、新病棟でも患者ファーストの大学病院のあり方を追究して、サービスとホスピタリティーの向上を目指していただきたいと思います。

関連病院会としては、座談会の中で天谷医学部長が話されている「医学部として今後戦略が必要な問題は関連病院との連携である」というご指摘にエールを送ります。医学部と関連病院との現在の主な関係は医師の派遣元と派遣先という関係ですが、そのつながりは各教室（医局）と各病院との間の個別の関係が主体であり、医学部としての戦略的見地に立った体制はできていないのが現状です。新しい時代の慶應医学の発展のためには、個々の教室や病院の事情だけにとらわれず、医学部と関連病院は大局的にどのように連携していくべきか、そのためにはどのようなしくみを作るべきかを互いに真剣に議論していく必要があります。

最後になりましたが、医学部、病院が新病院棟の竣工を機に、診療、研究、教育のすべての分野に渡って新しい時代を切り開かれることを祈念いたします。

自分の未来への投資

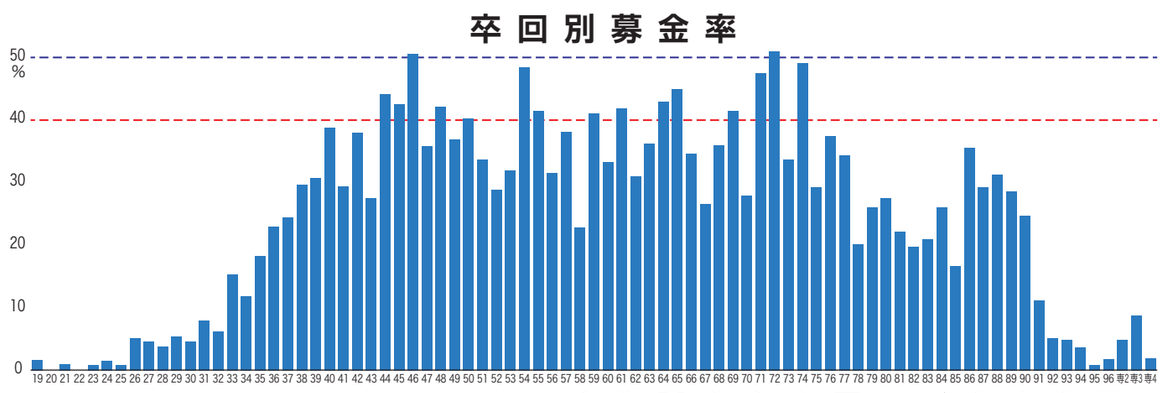
丸紅健康開発センター　慶應産業保健研究会会長　山澤　文裕（60回）

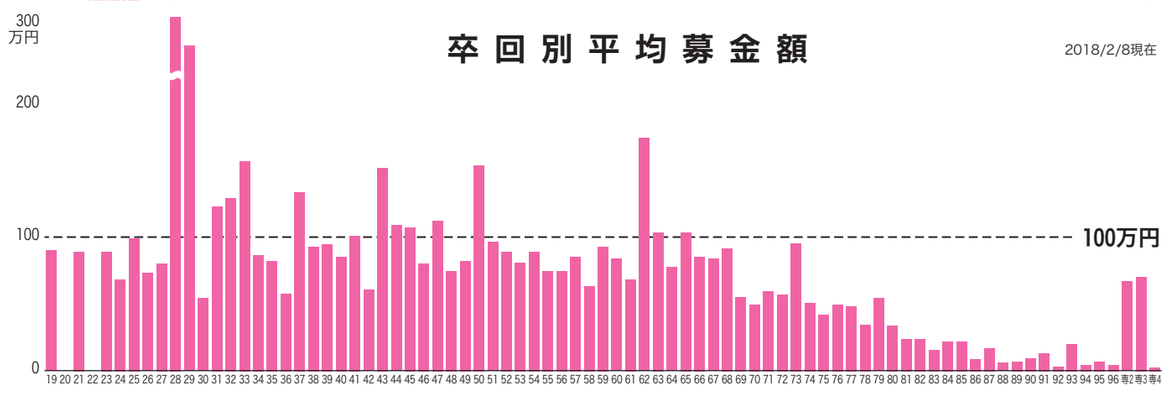
「新病棟建設のため100万円の寄付をお願いします」とのご案内が届き始めて早５年が経ちました。何度も続くと不思議なことに新しいバランスが生じ、寄付をすることを自然に思うようになりました。「慶應ファースト」だから、三四会員は寄付しなければならない、という偏ったご案内であったなら、新病棟建設への寄付について理解されえなかったことと思います。三四会員は誰よりも独立自尊を体現し、十分に考え、方針に納得した上で行動するからです。ご案内を継続された三四会募金委員会の長年の努力に敬意を表したいと思います。しかし、大成功であったかというと実はそうではなく、まだ当初目標額に達しておらず、募金委員会としては最後までがんばらなければならない状況です。

今回の新病棟建設への寄付は慶應病院の未来への投資にとどまらず、三四会員自身や社会への投資であると理解しています。慶應病院の未来が素晴らしくなることは、三四会員として高いプライドを持つことができますし、日本のみならず世界への貢献が無限に広がる可能性があります。

Needsがあれば、適切にSeedsし、より良い収穫ができるように栄養を与えることは当然のことです。他の大学病院では見え麗しい病棟が次々と建設されていますので、今回やっと追いつくことができます。追い越すのかどうか、わかりませんが、リスクマネジメントの観点から大きな前進です。若い優秀なスタッフが自信を持って「すべてにおいて最高の病院」と言える病院作りの第1歩であり、慶應医学ブランドを世界のトップレベルに高める事業の始まりです。

三四会員の皆様、自身の未来のために、ぜひ慶應病院に栄養を与えていただきたく思います。これは間違いなく良質な投資であります。今回の投資期限は2018年３月末日です。遅れることのないようにお願いいたします。三四会の真の実力を見せつけましょう。





＊大先輩からも厚いご意志を賜っておりますことに敬意を表します

鑑賞知来

「私、失敗しないので」

高視聴率を稼ぐ人気ドラマ中で、人気女優の演じる見目麗しい敏腕外科医が放つ決め台詞である。手術が「成功」したらどんな難病も進行癌も完治してしまう、という現実離れしたコンセプトであるが、ドラマとして視聴する分には純粋に面白い。そして、同じコンセプトの名作医療漫画を思い出す。

45年前、医師免許を持つ一漫画家によりブラックジャック（以下BJ）という外科医が生み出された。エキセントリックな性格とライフスタイルを持つが、天才的な技術で強烈なカリスマを発揮する外科医であった。中高生時代の私はこのキャラクターに惹かれ単行本を全巻読破し、今でも細かい台詞の一言まで記憶している。医学部卒業後、脇目も振ることなく志望して外科医になったが、進路選択の上でBJへの憧れが意識の深層にあったのは間違いない。

さて。BJ誕生後ほぼ半世紀を経た今、外科の人気は低迷している。先日新専門医制度における専攻医登録が終了したが、現時点で外科の専攻医登録者数は例年に比べて6%ほど少ない767名である。特に地方格差が顕著となっており、東京都の170名に対して、なんと1名のみの県が3つ存在するという由々しき事態である。わが慶應義塾にはこのような中でも昨年に続いて20名を超える応募があり、改めて諸先輩方の築かれてきた底力を実感している次第であるが、自分たちさえ安泰ならば良いなどとは言っていられない。

反面、外科医を主役としたドラマは連綿と続いており常に人気作品である。BJを見て外科医を志す若者はもういないかも知れないが、外科は永遠にoperation theaterの主役であり、潰えることはない。手術に魅せられて外科を選ぶ若者を増やすのはわれわれの使命である。昨春より多くの研修医を抱える中核病院の外科部長を拝命し、如何にして若い世代に外科の魅力を伝えて行くか連日自己問答中である。

（東京都済生会中央病院　外科部長　原田裕久　71回）